

今週の為替相場見通し(2025年7月14日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		144.24 ~ 147.52	147.42	144.50 ~ 149.50
ユーロ	(ドル)		1.1663 ~ 1.1789	1.1693	1.1600 ~ 1.1800
(1ユーロ=)	(円)		169.99 ~ 172.40	172.17	168.50 ~ 173.00
英ポンド	(ドル)		1.3481 ~ 1.3653	1.3490	1.3300 ~ 1.3800
(1英ポンド=)	(円)	*	196.76 ~ 199.83	198.89	190.50 ~ 200.50
豪ドル	(ドル)		0.6485 ~ 0.6595	0.6574	0.6450 ~ 0.6550
(1豪ドル=)	(円)	*	94.24 ~ 97.06	96.96	92.00 ~ 98.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 大野 梨紗

(1)今週の予想レンジ: 144.50 ~ 149.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

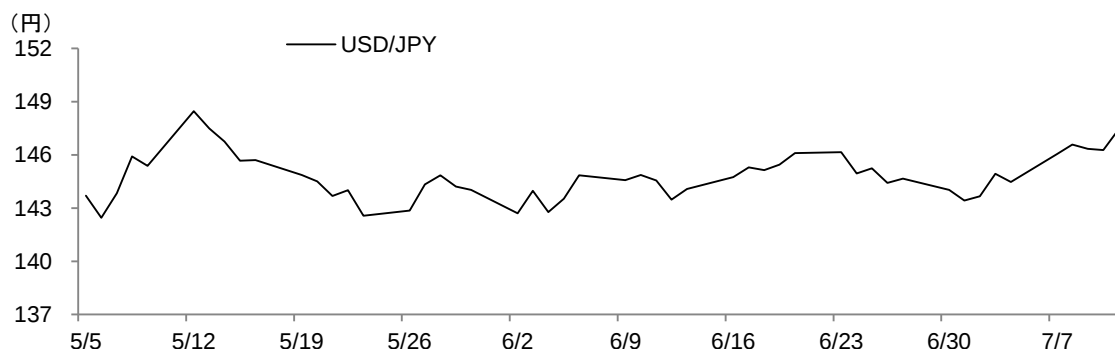
先週のドル/円は上値重く推移した。週初7日、144.49円でオープンしたドル/円は、米国によるBRICS同調国に対する関税措置発表を受けてドル高が進み、145円台へ乗せた。海外時間は、米金利の大幅上昇や米政権による日本を含む貿易相手国への新関税率通知がドル買いを後押し、146円台に続伸。8日、ドル/円は146円を挟み方向感なく推移。海外時間は、米金利上昇を受け一時147円手前まで上昇した。9日、ドル/円は147円台前半での推移。海外時間は、米金利の大幅低下が重しとなり、146円台前半に下落。公表されたFOMC議事要旨(6月会合分)の内容にサプライズはなく、材料視されなかった。10日、ドル/円はドル安相場が続いて146円台を割り込んだものの、底堅い米金利に連れ146円台を回復。海外時間は、米新規失業保険申請件数の良好な結果を支えに一時146円台後半まで値を伸ばすも、その後は米金利低下を受け反落し、146円台前半に値を下げた。11日、ドル/円は米国によるカナダへの関税措置公表を受け146円台後半まで上昇。海外時間には米金利上昇を背景にドル/円は週高値となる147.52円まで上昇し、147.42円で越週した。

今週のドル/円は底堅い展開を予想する。トランプ米大統領は先週7日(月)に日本への25%の関税を含め14か国に対し、来月8月1日(金)より課すとした新関税率を公表した。さらに10日(木)にカナダへ35%の関税、ブラジルへ50%の関税を、また12日(土)にはEUおよびメキシコへも30%の関税を課すことを公表した。米国が関税交渉中の各国に対し強硬的な政策を進めるとの思惑が一段と強まっており、高関税政策が米国内でのインフレを招くとの見方を背景とした米金利の先高観は、ドル高方向に振れやすい一因と言えよう。日米の関税交渉の行方が不透明な中、本邦では20日(日)に参議院選挙の投開票を控える。今回の選挙の争点は「物価高政策」であり、与党は現金給付を、野党は消費税減税を主張する構図となっている。仮に与党が過半数割れの敗北となれば、現政権退陣の憶測が飛び交うことが想定され、財政拡張および金融緩和路線期待を受けた円売りで反応する可能性がある。他方、米国では今週、15日(火)米6月消費者物価指数(CPI)、16日(水)米6月生産者物価指数(PPI)、17日(木)米6月小売売上高等、複数の重要指標発表を控える。また15日(火)から17日(木)にかけてはFRB高官による発言機会も予定されており、これらの内容によっては上下に振れる展開も警戒したいところ。しかし本邦のイベントを来週末に控え、日米関税交渉の進展が見込めず、日銀の利上げ観測が後退している状況下では円売り圧力が相応に強まりやすいものと考えられ、ドル/円の下値は限定的と見る。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/7~7/11)の値動き:

安値 144.24 円 高値 147.52 円 終値 147.42 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第二チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1800 168.50 ~ 173.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

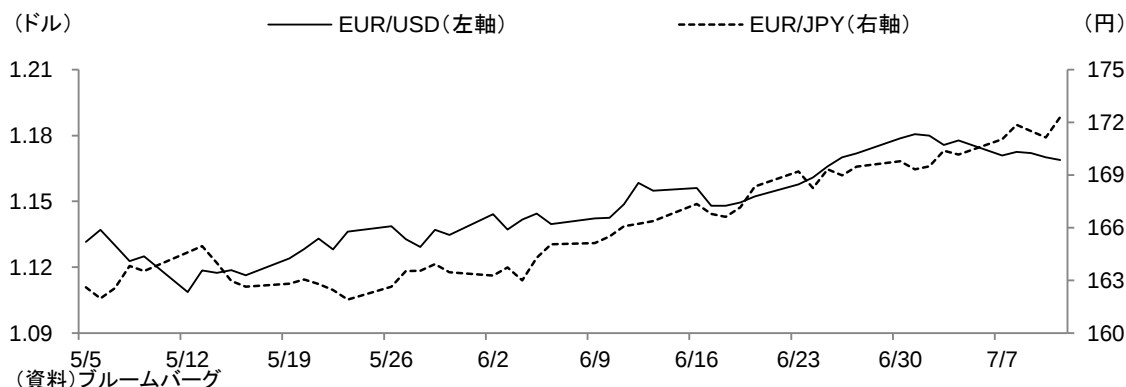
先週のユーロ/ドルはじりじりと値を下げ、1.17を割り込んだ。週初7日、1.1781でオープンしたユーロはBRICS諸国による反米政策に同調する国に対して米国が追加関税を課すとの報道を受けてか米金利の上昇とともにドル買いが進行。1.17を割り込む場面が見られた。8日、独金利上昇と共に1.17台後半に上昇したが、その後は米金利上昇が重しとなり一時1.17を割り込んだ。しかし、米6月NY連銀1年期待インフレが市場予想を下回ったことも影響してか米金利低下する中、1.17台を回復した。9日、新規材料に欠ける中で、1.17台前半を中心とした狭い範囲での値動きに留まった。10日、ドル全面安を受け1.17台半ばへ上昇も、米新規失業保険申請件数が市場予想を下回ったことや米金利上昇が重しとなり、一時週安値となる1.1663に反落した。その後は堅調な米債入札の結果を好感した米金利の低下とともに1.17台を回復した。11日は、近々EU向けの関税書簡がトランプ米大統領から届くとの報道が嫌気され、1.16台後半まで下落。ただ、一巡後は買い戻され1.17台を前に方向感に欠ける推移となった。結局、1.1693で越週した。

今週のユーロ/ドルはレンジ推移を予想する。引き続き米国の関税政策動向及び米国の物価や消費関連のハードデータが市場の方向感を決める展開となりそう。週末にはトランプ米大統領はEUに対して30%の関税を課すと表明。先週は改めて米国から関税税率が提示された日本や韓国、ブラジル等の国はいずれも通貨安で反応しており、14日(月)東京時間朝方はユーロが売られる展開。しかし、実際の関税発動は8月1日(金)であること、その間に交渉の余地があるとされており、各国に関税書簡が送られる状況においても株式市場はTACOTレードを織り込み堅調に推移。為替市場も総悲観のような状況にはならないと想定されユーロの下落余地は限定的。加えて、米国からの関税発動に対して欧州委員会は対米報復措置を8月1日(金)まで延長する旨発表しており、これもユーロのサポート要因となるだろう。7月に入り1.8000を超える場面もあったが上値の重さが意識されたほか、先週央から日足一目均衡表の転換線(7月14日執筆時点では1.1730)を下回り抵抗線となっている。下落した場合でも基準線(7月14日執筆時点では1.1601)がサポートとなると予想され、レンジ感が強くなっている模様。その他今週は15日(火)にユーロ圏7月ZEW景気期待指数が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/7~7/11)の値動き:

(対ドル)	安値 1.1663	高値 1.1789	終値 1.1693
(対円)	安値 169.99	高値 172.40	終値 172.17



3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.3300 ~ 1.3800 190.50 ~ 200.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで下落した。週初7日、米関税の交渉期限が週半ばに予定されていることが意識されたか全体的なドル高で推移。翌8日には日韓の米関税交渉が延長されることとなり一時ドル高に振れる。9日は反発し、方向感なく推移した。10日、米新規失業保険申請数が予想を下回り、米10年債利回りの上昇を伴ってドル高に推移。11日は早朝に英月次GDPが発表され、市場予想を下回り5月は前月比0.1%の縮小となった。英ポンドは上値重く下落を取り戻せず、週を通して対ドルで下落した。

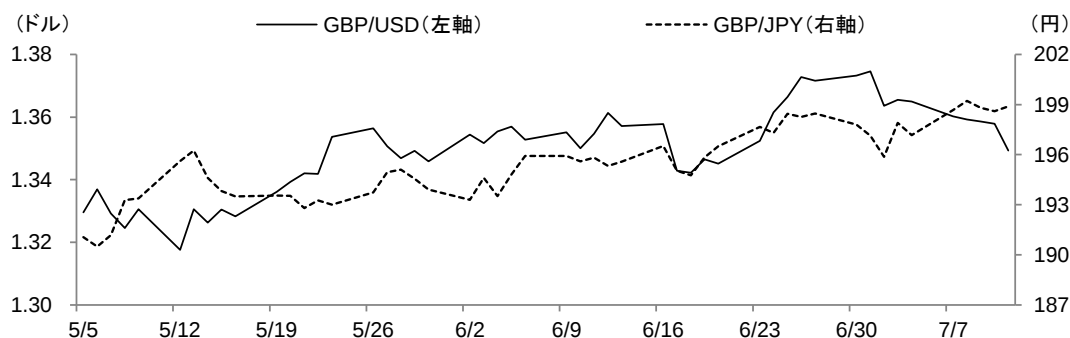
今週の英ポンドは上値重い推移を想定する。15日(火)に米6月CPI、16日(水)に英6月CPIがそれぞれ予定されている。英5月CPIは3.4%で引き続き夏の間も3%以上で推移するよう思うが、サービスインフレは緩和方向に転じている。続けて弱含むデータが出れば利下げ観測が高まる。スワップ市場では英利下げ年内2回が既に織り込まれており、次回8月会合でも利下げ観測が進んでいる。政治的な混乱や財務における不透明感、特に可能性としてさらなる増税が意識される中、BOEがハト派的に傾く展開が容易に想像できる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/7~7/11)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3481 高値 1.3653 終値 1.3490

(対円) 安値 196.76 高値 199.83 終値 198.89



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

国際為替部 為替デリバティブチーム 岩下 義明

(1) 今週の予想レンジ: 0.6450 ~ 0.6550 92.00 ~ 98.50 円

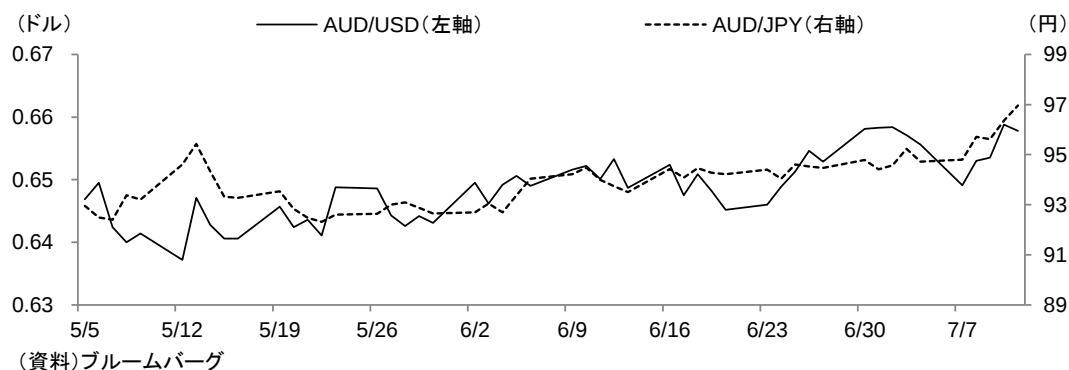
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは往って来いの様相。7日、RBAを翌日に控えて材料少ない中、ドル高に押されて下値を伸ばした。海外時間には週安値である0.6485を付け、そのまま安値付近で引けた。8日、RBAは政策金利を広範に予想されていた▲25bpの利下げではなく3.85%据え置きサプライズとなり、国債の利回り急上昇とともに豪ドル買いとなり一時0.6559を付けた。海外時間には半値戻しとなるなか、トランプ米大統領の銅50%関税賦課発言により銅価格が急騰し、豪ドルもつられてやや買われた。9日、RBNZは市場のコンセンサス通り政策金利を3.25%に据え置き、特段重要なヘッドラインがない中豪ドルは方向感なく0.6530を中心としたレンジで推移。10日、FOMCメンバーであるサンフランシスコ連銀総裁の「関税による物価の影響は当初の予想より緩やかになる」等の発言を受けたリスクオンムードからの堅調な米株とドル売りに押されて海外時間で豪ドルは上昇し、そのまま高値圏で引けた。11日、朝方週高値の0.6595を付けたあとは週末を控えて動意薄く、0.6580を挟んで推移し結局0.6574で越週。

今週の豪ドルは上値が重い展開を予想。15日(火)には豪ウェストパック消費者信頼感(7月)・米CPI(6月)、17日(木)には豪雇用統計(6月)の発表が予定されている。8日のRBAの政策金利据え置きはサプライズとなったものの、ブロックRBA総裁の記者会見からすると利下げ延期はあくまでタイミングの問題であり大局的には利下げ方向という方針は変わっていないことが伺える。であれば、今週の雇用統計で多少上振れたところで次回での利下げ織り込みが多少剥がれることはあるかもしれないが、RBAの方針に大きな影響を及ぼすとは考えにくい。引き続きマーケットの注目は関税か。最終的には関税の交渉期限である8月1日(金)までわからないものの、豪ドルはオーストラリアに対する関税だけでなく、天然資源に対する関税にも振られやすく、今週好材料が出たところで安心はできないことからトレンドをもった豪ドル買いにはつながらず、神経質な展開を予想。水準的には豪ドルが高値圏内、ドルインデックスがここ3年ぐらいのレンジを下抜けて安値圏で推移するなか、足許不安定な局面ではさらなる豪ドル上昇は見込みづらいか。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/7~7/11)の値動き: (対ドル) 安値 0.6485 高値 0.6595 終値 0.6574
(対円) 安値 94.24 高値 97.06 終値 96.96



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。